

愛知用水事業の歴史地理的考察

一、はじめに

加 藤 武 夫

愛知用水が通水してすでに十年を経過し、この間における社会、経済の変動はいちじるしいものがある。したがって愛知用水の受益の形態、アロケーション、受益面積の変化は地域社会に大きい影響を与えている。このような問題については、すでに森滝健一郎の調査があり⁽¹⁾、愛知用水学術調査団では地域開発に関する単行本を発行している⁽²⁾。しかし、これとともにこの大事業が成立し着工される段階を歴史地理学的に究明することも必要であり、すでにそれが可能な時期となった。これに対する公的刊行物としては愛知用水公団、愛知県、ならびに愛知用水土地改良区の共同編集による「愛知用水史」があり⁽³⁾筆者もその執筆編集に関係した。しかし、本稿においては、これを基礎としながら、歴史地理的な視点からこの過程を見直すことにした。とくに、この事業の成立の遠因となった自然環境と、これを具体化させた地域住民の期成活動を推進させた社会、経済的環境と、この運動を吸いあげて国家的国際的な大事業にまで発展させた国家的機構を述べて、その開発の過程を考察してみることにした。

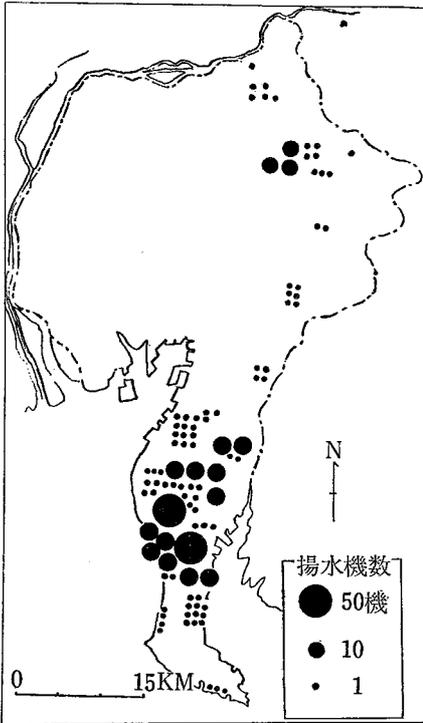
二、自然環境

四二三億円の巨費を投じて竣工したこの大事業の基盤となった自然条件、とくに気候と地形の意義を考えたい。後述するように愛知用水期成運動の中心となったのは、知多半島中部地域であるから、この地域の状態を観察する。

① 気候条件 愛知県においては、一九五二年に「愛知県農業気候図」の大冊が発行され、⁽⁵⁾、詳細な観測にもとづく成果が図化されている。これを観察すると知多半島および濃尾平野の大部分は、かなり内陸性気候を示し愛知県東部の山間部ならびに渥美半島の沿海部よりも降水量が少ない。すなわち、東部山地方では年降水量が二六〇〇ミリを越えるところがあり、渥美半島でも一七〇〇ミリ以上であるのに対し、濃尾平野ならびに尾張丘陵一帯では一五〇〇ミリであり、知多半島の大部分も一六〇〇ミリ以下である。しかし、この降水量はほぼ日本の平均値に近く、瀬戸内の少雨地域と比較しても必ずしも少ないとはいわれない。ここに問題となるのは夏期における降水量であるが、これも同図集によって観察すると、知多半島および尾張丘陵のいわゆる愛知用水地域の八月の降水量は一四〇ミリ以下であるのに対し、東部山地では三六〇ミリを越えている。また干天率（一〇日間中の無降水日率）の図でも愛知県西半が高く、その中でも尾張東部丘陵地域がさらに高くなっている。同様に梅雨期を代表する六月の干天率も名古屋の東南部一帯に高い数値を示している。これは瀬戸内地域と同様に比較的内陸気候で、日本におけるため池灌漑の卓越する地域であるけれども⁽⁶⁾、これだけで乏水性の理由とすることは当を得ない。むしろ地形的要因を重視すべきである。

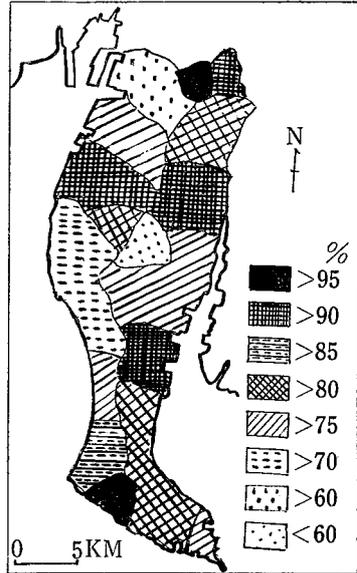
② 地形条件 尾張平野東部にはほぼ三段の平坦段丘面が認められ、その東には開析のすすんだ猪高層、瀬戸夾炭

層が分布している。この状態は知多半島にまで延長し原表面にはかなりの平坦面を保ちつつ、開析は相当に進んで、樹枝状の開析谷を形成している。台地丘陵地は乏水地域で表流水を利用することは困難で、最近まで高度な土地利用に進展することなく、ときにはバッドランドとなって放置されていた。しかし、侵食谷の谷頭のため池を構築することによって、低地面の水田化は進んだ。すなわち、尾張平野東部では江戸初期には入鹿池が尾張藩の援助によって構築され、八〇〇ヘクタールの新田を開拓したのをはじめ、直接犬山扇状地の扇頂部から引水する木津用水をひらき、さらにこれから新木津用水を延長して五二〇〇ヘクタールの開拓をすすめた。このようにして小牧面、鳥居松面の低位段丘面の開拓は相当にすすんだ。これに対し、名古屋東部丘陵地域では猪高面の侵食がすすんで平坦面を残すところが少なく、谷底低地はかなり広大で、天水ならびに滲透水に依存する大型のため池が谷頭に設けられ、これを利用する一毛作田が開かれた。これによって多くの新田集落が成立し、したがって江戸時代では人口漸増の地域となっていた⁽⁶⁾。知多半島でもかなりの平坦面を残してはいるけれども、その土地利用は粗放的で、わずかに冬は小麦、夏はサツマイモが作付けられていた程度である。侵食谷もよく発達し、谷頭には大小のため池が構築され、これによって一毛作田が経営されていることは名古屋東部の場合と同様である。半島の中、南部は半島が狭小で侵食谷が小さく、ため池依存度が高くなっている。これらのため池の効率を向上するため、マンボウと称する地下水路によって用水池を連結するような工作もいくつか見受けられる。知多半島においても、巨大なため池は大部分が江戸期に構築されたもので、半田市史に記録されているため池の構築年代によってもこれを知ることが可能である⁽⁷⁾。このような状況のもとで、用水池の管理は嚴重で「小地下」と称する農民代表者によって、宗教的儀式をともなった管理運営が行なわれた。天水またはわずかな滲透水に依存するため池灌漑では、夏の少雨はただちに干害となってあらわれ、雨



第2図 愛知用水地域における地下水用動力揚水機の分布—愛知用水通水前
愛知用水土地改良事業計画書
(1951年)により作成

ど一部の小河川を利用し得るにすぎない状況で、知多半島の乏水性は第一義的には比較的少雨の気候条件ではあるけれども、乏水性をこのように深刻にしたのは地形的環境によるものと解すべきである。しかし、一九四四(昭和一九)年ならびに一九四七(昭和二二)年の盛夏期の記録的な少雨が深刻



第1図 知多半島におけるため池かんがい率—愛知用水通水前
愛知用水土地改良区の資料により作成(ため池に依存する耕地の全耕地に対する比率)

乞いに関するいくつかの伝説や慣習を生んだばかりでなく、人工降雨を思わせるような降水を希望する行事が官民一致で行なわれたこともあった(8)。知多半島中部地域では粘土層上の砂礫層に地下水が滞留し浅井戸による地下水が得られるので、戦前からこれを利用する多数の動力揚水が行なわれてきた。狭小な半島性の地形のため、表流水は阿久比川な

な干害となって現われ、これが当時の社会環境と相まって、用水期成運動の発端となった。

三、期成運動の開始

戦中、戦後の食糧難は戦禍をもなつて深刻な社会不安を呼んだ。この地域では南海地震（一九四四年）、三河地震（一九四五年）の震害がこれに加わり、枕崎、阿久根の両台風による風水害がこれに追い打ちをかけた。また、一九四四年と一九四七（昭和二二）年の干害は深刻で米の大減収となった。ここでは資料の整っている一九四七年の場合について述べる。第1表でみるように、この年は記録的な少雨であつたばかりでなく盛夏にはほとんど雨らしいもの

第1表 1947（昭和22）年における降水量（上段）と降水日数（下段）

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
名古屋	84.6	37.2	79.8	62.5	172.3	83.3	145.9	37.8	217.2	64.9	17.3	74.0	1086.8
	12	19	16	8	17	21	13	7	17	13	10	8	97
豊明	90.1	30.3	78.1	52.3	206.3	72.9	128.5	31.0	181.4	55.2	30.1	10.5	1016.4
	8	5	9	6	13	11	10	2	13	9	5	7	94
大野 (常滑市)	84.9	16.9	41.8	53.9	149.8	125.8	118.9	36.3	214.0	62.4	19.1	69.7	1047.8
	8	7	9	6	14	14	8	4	9	9	5	7	100
豊浜 (南知多町)	141.2	16.0	78.7	54.1	129.9	98.6	100.4	26.1	279.8	86.5	33.5	71.7	1116.5
	7	5	8	4	6	14	13	2	11	10	8	6	97

（愛知用水土地改良事業計画書による）

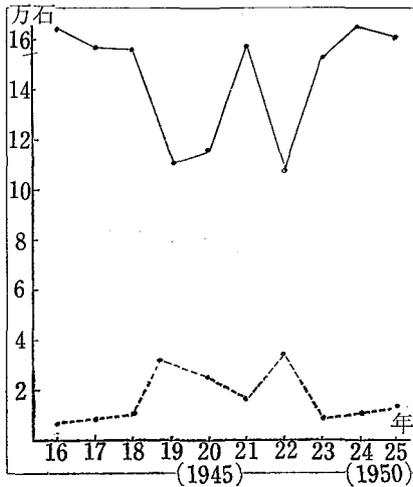
第2表 知多半島における1947（昭和22）年の大干害の市町村別干害率

地区	作付面積(A)	干害面積(B)	干害率(B/A)×100	地区	作付面積(A)	干害面積(B)	干害率(B/A)×100
河久比	6,170反	890反	14.42%	西浦	2,010反	451反	22.41%
東浦	7,480	1,424	19.04	小鈴	2,330	392	16.82
大府	2,719	415	15.31	内海	2,460	138	5.61
有松	660	32	4.85	豊浜	1,120	116	10.36
大高	1,860	43	2.31	師崎	770	34	4.42
上野	4,480	15	0.33	野間	3,210	201	6.25
横須賀	3,980	233	5.85	篠島	—	16	—
八幡	4,430	574	12.96	日間賀島	—	3	—
岡田	950	141	14.84	河和	3,910	394	10.08
旭	3,460	268	7.75	富貴	1,900	190	10.00
三大	3,720	1,051	28.25	武豊	1,570	104	6.62
大野	40	28	70.00	半田	7,630	1,630	21.36
鬼崎	1,730	186	10.75				
常滑	1,050	299	28.48				

(1959年 愛知県農事試験所の資料による)

を見ることなく、稲の作付不能または枯死するものが続出し、収穫皆無の水田も多く大減収となった⁹⁾。この干害率は知多郡にはなほだしく、中部では七〇%にも達するところがあった。食糧難の時代に加えて、このような災害に際会して、水田作の安定を希望するうごきが活発化するにいたった。

①期成運動の発端 木曾川の水を知多半島にまで導水して水田灌漑を行ないたいという構想は、すでに大正中期にまでさかのぼる。元知多郡富貴村（現在武豊町に併合）長であった森田万右衛門は明治用水を範として木曾川の水を知多半島にまで導くことを提唱し、郡農村会の席上などでこの抱負を発表していたという。さらにこれを具体化したものに奥村鉄三の構想があった。昭和の初期、当時の愛知県知事篠原英太郎と図って、木曾川の水を既設の木津用水の水路を利用して導き、これを揚水して知多半島西部に灌水しようとするもので、その用水源として木曾川上流の簸原（現



第3図 戦中戦後における知多郡の米の収
穫量(上)と減収量(下)
(愛知県農業試験所資料より作成)

在長野県木曾郡木祖村)に用水池を構築しようとする具体的なもので⁽⁹⁾のちの愛知用水事業の先駆とみなすべきものであったが、資金難に加えて太平洋戦争への進展にもなつて立ち消えになった。このような先駆的構想が前述の一九五七年の異常干害と食糧危機とを契期してよみがえるにいたつた。

この初期の段階の指導者の一人久野庄太郎は知多郡八幡村(現在知多市)の豪農で、一九四五(昭和二〇)年には天皇巡幸の際、知事の推挙を受けて営農に関する御前講話を行つた経験者でもある。戦前の森田構想を耳にしてきた関係もあり、これを基礎にした木曾川導水計画を中堅農民層や有力者に意志を伝え、知多郡中堅農民の研修団体である「知多郡農村同志会」をその活動の母胎とすることにした。これとは別に当時県立安城農林学校の教諭(のち半田農業高校に転じた)浜島辰雄は、久野らの運動を新聞紙上で知つたので、独自に作成した用水計画図を携えて久野

を訪問した。浜島氏は豊明村(現在は町制)出身で戦時中小牧の陸軍幼年学校に在職中、任地と自宅を往復して現在の愛知用水地域の実状をよく知つていた。とくに一九四四年の干害の際には、農民が土瓶で苗に灌水しているのを見て義憤を感じ、その後余暇を見て陸地測量部の二万五千分の一の地形図を手にして現地を巡検し、図上に木曾川からの導水路を記入した⁽¹⁰⁾。しかも、用水源として木曾川上流部にダムを構築するという具体的なもので、のちの現実の愛知用水事業と本質的な差のないものであつた。この図

を見た久野は感心し、相携えて用水実現のため協力することを誓ったという。この図面はのち愛知用水期成同盟会が期成運動に使用するための説明図の原図となった。青年中堅農民層で組織された知多郡農村同志会はこの計画に全面的な賛意を表明して、一九四八（昭和二三）年十月に「愛知用水期成同盟会」が成立した。期成会では地元市町村長、地方事務所長を通じて全知多郡の市町村会に働きかけ、市町村ぐるみの愛知用水期成同盟会となり翌一九四九（昭和二四）年には名古屋東部地域をも含めた全域的なものに発展した。

② 期成運動の展開 このような食糧難を背景としておこされた期成運動の対象は二つの方向にむけられた。その一つは地域農民の全面的な支持を得るための内部結束を強化するための啓蒙活動であり、他の一つは関係各官庁諸機関への要請ならびに陳情活動であった。

内部の結束を固めるためには、つぎのような方法をとった。農村同志会員がその中核となり、部落単位の期成集會を開催し、期成運動の趣旨を説明を行なって意志の統一をはかり、全面的な協力体制を確立する要があった。しかし、その集會はきわめて粗朴な方法を取り、浪曲師梅之枝鶯の助力を得て、浪曲会にことよせて農民を参集させた。しかも、その浪曲の内容は明治用水の計画者都築弥厚を主題としたものであり、浪曲での感激の消え去らないうちに、同志会の幹部は用水を実現させたいことを力説し、そのためには関係地域の農民の団結の必要なことを訴えた。また、名古屋の篤志家の経済援助をうけて、毎日新聞記者岸哲夫の小説「明治川」⁽¹²⁾を多数購入し各方面に配布した。これも都築弥厚の労苦と、その遺志をうけついで、岡本兵松、伊子田与八郎らが明治用水を完成させるまでの過程を小説化したもので、愛知用水期成のための農民運動の教科書としてはまことに時機を得たものであった。

これとは別に外部への要請と陳情工作が進展した。一九四八（昭和二三）年秋には第二次吉田内閣が成立し、戦後

の不安と混乱をきわめた中央政界も、ようやく安定の方向を見出した。前にも述べたように、同志会は知多郡地方事務所長や地元町村長を通じて、知多郡市町村会に働きかけ、その中で当時の半田市長森信蔵が推進の中核となり、地元選出の議員を通じて、愛知県、国家機関に推進を要請した。期成同盟会長に推された森半田市長は戦前アメリカ合衆国における記者生活を通じて米国にも知人が多く、しかも彼の国における大規模な開発事業を見ているので視野が広く、このような期成運動の推進役としては適任であった。かくして期成会の会長に就任したが、そのとき関係者に配布された資料は久野・浜島らによって作成されたものであるが、その内容は後の愛知用水計画と比較しても大差のないものであった。また国志会幹部は農林省開拓局長伊藤佐^{たすく}が郷土の豊明村（現在町）の出身であることを幸とし、一九四八年一二月陳情団を組織して上京し、つぎつぎと関連をたどり、紹介を得て、農林省を中核としながら、通産省（発電関係）・建設省（河川関係）・経済安定本部・高松宮・吉田首相を歴訪し、吉田首相から援助の確約を得た。しかし、この間において愛知用水事業が国土開発の一環として総合的な多目的用水でなくてはならないことを教えられた。このような陳情運動はその後もくり返り行なわれたが、その際に持参したのが、同志会員らが久野邸などをついた鏡餅であったことも、当時の農民運動の面目が伺われる。

その後の期成運動の中で特筆すべきは国際復興開発銀行すなわち世界銀行への接近であった。一九五〇（昭和二五）年、全国市長代表団が米国情勢視察を行なった際、同盟会長の森半田市長もこれに加わり、これを契機として世界銀行を訪問し総裁ブラック（E.R. Black）、副総裁（R.L. Garner）を訪問して援助を要請した。中央政府機関に陳情の際、いつも問題とされたのは資金源であるので、世銀の援助と借款の下で、これを推進させようとする考えであった。この訪問によってブラック総裁は好意を示した。なお渡米の際に同志会の名目で広報用に作成した「愛知用水

第3表 愛知用水事業の進展

国家・社会環境	農民運動の進展	事業の進展
昭和19 敗戦の気配濃厚 大干害 南海地震 戦災	明治末 森田万右衛門の用水構想 昭和初期奥村鉄三らの用水構想	大正3 名古屋上水道通水
昭和20(1945) 三河地震 大 戦 災 敗 戦 台風災害 食糧難	昭和20 久野庄太郎天皇に営農説明	
昭和21 米よこせデモ 深刻な社会不安 農地改革		
昭和22 ニ・ースト 新憲法施行 大 干 害		
昭和23 第二次吉田内閣成立	昭和23 久野庄太郎 浜島辰雄ら 農 村同志会を母胎に運動開始 愛知用水期成同盟会成立 中央へ陳情	
昭和24 土地改良法制定	昭和24 関係全域に期成同盟会成立	昭和24 農林省の現地調査
昭和25(1950) 朝鮮動乱	昭和25 広報パンフレット発行	昭和25 森期成同盟会長世界銀行訪問

<p>昭和26 国土総合開発法公布 サンフランシスコ講和条約 日米安全保障条約に調印 国土総合開発法施行</p>	<p>森同盟会長（半田市長）渡米 昭和26 土地改良区設定にもとづく住 民の意志統一 昭和27 愛知用水土地改良区 設立 「愛知用水新聞」発刊</p>	<p>昭和26 国土総合開発法にもとづく「木 曾特定地域」を指定 農林省の 「木曾川水系総合農業水利調査 事務所」開設</p>
<p>昭和28 経済自立四原則発表</p>		<p>昭和27 世銀ドール 日本経済調査団と して来日</p>
<p>昭和31(1961)国連に加盟</p>		<p>昭和28 世銀副総裁ガーナー来日 借款交渉</p>
<p>昭和33(1961)名古屋南部工業地域に工 業用水法適用（地下水規制）</p>	<p>昭和31「愛知用水だより」発刊（愛知 用水土地改良区）</p>	<p>昭和29 世銀調査団相ついで来日 愛知用水協力会（会長桑原知事） 結成</p>
<p>昭和34 東海製鉄（現新日鉄）起工 名古屋南部臨海工業地帯造成 活発となる。 伊勢湾台風（9月26日）</p>		<p>昭和30 愛知用水公団設立 昭和31 畑かん実験農場（大府町）設立 昭和32 牧尾ダム・三好ダム着工 昭和33 全面的に着工 ↑——— 最新の技術を投入して工事は急 ↓——— ピッチで進展</p>
<p>昭和35 池田内閣成立</p>		<p>昭和36 通水式（9月30日）愛知用水公 団豊川用水の事業を継承</p>
<p>昭和36 農業基本法成立 （所得倍増計画時代）</p>		<p>昭和37 「愛知用水技術誌」発刊</p>
<p>昭和39 東京オリンピック 新幹線開通</p>		<p>昭和43 豊川用水通水 愛知用水公団 水資源開発公 団に吸収合併</p>
<p>昭和44 総合農政と米の作付制限</p>		<p>昭和45 「愛知用水史」の実質的な完成</p>
<p>昭和45(1970) 万国博開催</p>		

の趣旨と理想」〔13〕と称するパンフレットを英訳したもの〔14〕を携行し、これを関係方面に多数配布した。この世銀への接近は、のち愛知用水事業に世銀借款の端緒をあたえたものであった。

なお、用水計画が具体化するにつれて、とくにその関心を深めたのが、今日の南知多町一帯の臨海漁村集落であった。この背後の丘陵はすでにミカンの栽培が古くから行なわれた中新統の頁岩と砂岩の互層地域であるが、ため池かんがい率の高いところであった。それとともに臨海部の集落では生活用水が欠乏し、わずかな共同井戸にそれを依存していた。その共同井戸においてすら「蛤水」と呼ばれる塩分の多い水質不良の水で、従来トラコーマの多発地帯として知られていた。この生活改善のため上水道としての愛知用水の利用は地域住民に大きい関心をよび、水道貯金を行なって用水の通水を渴望して待ちわびていたのはこの住民であった。のち、離島振興法によって、篠島・日間賀島へも通水が行なわれることとなって、今日では南知多一帯の観光開発にも寄与することがきわめて大である。

四、中央官庁の対応

① 国家社会環境の変化

一九五〇（昭和二五）年は朝鮮動乱の年であり、翌五一年にはサンフランシスコ講和条約が締結され、日本は自立への歩調を進めつつあった。荒廃した国土の再建のためには、食糧の自給・エネルギー資源の確保・防災対策の強化を推進する要があり、この年に制定された国土総合開発法は、この目的を達成するために河川の統制を通じて地域開発を促進することであった。これにもとづいて「木曾特定地域」が指定され、農林省においては「木曾川水系総合農業調査事務所」が名古屋に開設されることになった。この時流に乗り得た愛知用水計画は急に世の脚光を浴びるに

たった。

② 官庁の吸い上げ

このような状況の下で、農林省においても、しばしば現地調査を行なった。他方、世界銀行でも一九五二（昭和二七）年にはじめて現地調査を行ない引きつづいて来日した世銀農業調査団長ドール（R. H. Door）に対して、期成同盟会では要望を提出している。ついで翌五三年副総裁ガーナーが来日して借款交渉を行なった。その後も引きつづいて調査団が来日した。また技術導入に関しては世銀借款との関係もあって、米国技術商社パシフィックコンサルタンツ（P. C. I. 社長 Erik Floor）の技術指導を受けることにした。かくして、この計画は国際的規模にまで拡大することになった。ダムサイトについても籤原・滝越・飛驒川水系の高根など各種の案が出されたが、経済的理由とのことで王滝村の二子持が有力となり、工法もはじめのコンクリートダムの構想から転じてロックフィルダムとなり、ダムサイトも二子持に近い牧尾橋の地点に決定した。

このようにして、国土総合開発という錦旗のもとに世銀借款・技術援助というテコ入れを得て、国家的な大事業となった。しかも、能率的でかつ短期間に竣工を要請されることとなり、公団組織が考えられ、着々とその準備が進展した。かくして一九五五（昭和三〇）年に愛知用水公団が設立され、強力な一貫体制の下で着工の準備がすすめられ、一九五七（昭和三二）年牧尾ダムの着工を皮切りに、五八年からは全面的に工事が開始され、五ヶ年の短日月の間に完工し、一九六一（昭和三六）年九月に竣工、通水の運びとなった。

③ 社会環境の変化と農民に対する指導

このように地域農民の、水田かんがい用水を獲得したいというむしろ素朴ともいべき要求は、国家権力機構に完

全に吸い上げられ、ひとたび軌道に乗った愛知用水開発事業は予定された計画に従って急速に進捗した。この間に日本の経済はようやく高度成長期に入り、岸内閣をへて、所得倍増を提唱する池田内閣の時代に突入した。名古屋南部の新しい臨海工業地帯の造成もこの間にすすみ、一九五九（昭和三四）年には現在の新日本製鉄名古屋製鉄所の前身である東海製鉄が着工された。この誘置をめぐる名古屋南部地域と桑名の臨海地域が対立したけれども、その最終決定を見たのは愛知用水を工業用水として、利用し得る見通しが確実となったことによるものである⁽¹⁵⁾。さらに、その前年（一九五八）年には名古屋港臨港地帯の一带に工業用水法が適用され、地下水汲み上げが規制されたことも、工業用水としての愛知用水の意義を大きくした。しかし、その設計と計画の中心はいうまでもなく農業用水であるので、受益農家に対して、賦課金に耐え得る収益の高い農業を要求する必要が生じ、急いで営農指導が開始された。公団においても大府町に畑地かんがい実験農場を設置して実験と研究を行ない、米国からは畑地かんがい、用水配分の権威者であるビショップ教授（ユタ大学教授）やスワナーを招いて指導に当らせた。農事試験所関係もこれととりくみ、愛知県農政部においても九ヶ所に畑地かんがい営農指導施設を設けて、現実の農民を相手にスプリンクラーなどの器具を借与して畑地かんがいの指導を行なった⁽¹⁶⁾。他方ではミカン栽培が奨励され、知多半島の開墾地の多くにミカンの新植が開始され、世間に「オレンジ運河」とさわがれる事態となった。公団幹部もいわゆる「天下り人事」と見られるものも多くみられた。この時点に立つと農民側は受身の立場に転じ、農民の利益代表機関として結成された「愛知用水土地改良区」も、その機関紙「愛知用水だより」などを通じて効果的な水の使用と収益の高い営農を呼びかけた。しかし、その成果が十分に熟しきっていないままに通水の日を迎えた。

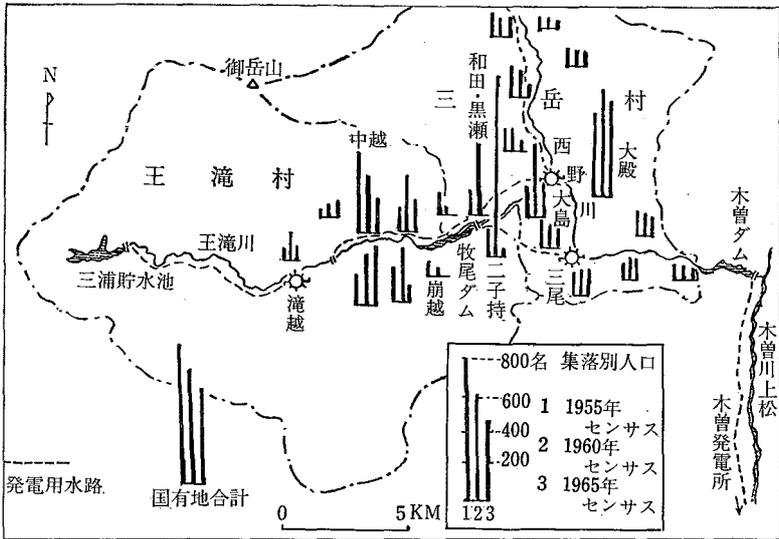
第4表 牧尾ダム建設にともなう補償費

(水資源開発公団の資料による)

工事総額	88億円(A)	
補償総額	42 (B)	
内訳	工事補償費 { 道路、森林の 鉄道、つげ かえなど }	16
	公共補償費	20
	個人補償費 (256戸)	6
	$\frac{\text{工事総額(A)のうち補償額(B)の占むる比率(B)}{\text{(A)}} \times 100$	47.7%

五、ダム建設と地域の変貌

ここでは、貯水池の牧尾ダムの建設が地元関係地域に与えた影響について若干言及する。これに関しては、「王滝村史」をはじめ、二三の報告がなされているが、(17)(18)(19)ここでは主として人口の推移と景観の変貌について述べらる。ダムサイトならびに工法については、日米両技術陣の間に意見の相異があり、二転、三転して牧尾橋の地点にロックフィル型式のダムを建設することに決定された。これは、建設費を軽減するという経済的な理由であったが、世銀借款の見返りとして購入した米国の工作機械を活用するには都合のよい地点であり、工法でもあるというふくみもがあった。いずれにしても関係地域の王滝、三岳両村は、受益をともなうことがない完全な犠牲的立場に立つこととなった。かくして絶対反対を標榜して立上ったが、国家的大事業という錦旗のもとで、しだいに条件闘争に切換ていった。しかし、この間における関係者の間の意見の対立、抗争がつづいたため、さいごには両村長に全権を委任して闘争からは直接手をひいた。公団側もこれに対しては誠意をもってあたり、水没の一木一草にいたるまで補償の対象としたため、補償額は莫大な額に達した。公共補償によって道路の改修学校・公民館の改修改築が行なわれプールまでつくらせた。宮林局側に対しても森林鉄道のつけかえ、飯場の移転などの補償を必要とした。このようにして補償額は四〇億円を越え、ダム構築費八八億円の約四八%を占めるにいたった。ダム建設に先



第4図 王滝・三岳両村における集落別人口の推移

立って移転移住を完了することが必要であるが、その中でも三岳村の和田、黒瀬の二集落および王滝村の崩越はダムサイトと水没地域となり完全に姿を消した。二子持集落は水没地点ではなかったけれども、ここが作業場の中心となつて、これも大部分移転を要請された。しかし、このような地点では工事の開始とともに、多数の外来者が入込み、一時的に人口の急増を見たけれども、竣工とともに引揚げたため、無住地となつた。この他、淀地・崩越・田島・三沢などの諸集落もそれぞれその大部分または一部分が移住を余儀なくされた。第5表でみられるように王滝村の場合は国有地が多く、水没者の中には営林署雇用者もかなり含まれている関係上、村内移住者が多いけれども、民有地の多い三岳村の場合はその生活の基盤がなく、村長の勧奨にも従つて、その大部分が各地に転任した。

移住を必要としないものも、耕地の補償金などを獲得して、それを基金としてそれぞれ生活改善に使用した。

第5表 牧尾ダム建設にともなう水没の状況

(王滝村・三岳村資料により集計)

村		王 滝 村	三 岳 村
面積 国有地面積		31,003ha 26,110	12,005ha 2,100
水没の 情 況	村 外 移 住	52戸 (307名)	41戸 (200名)
	村 内 移 住	43戸 (205名)	1戸 (6名)
	水 没 した 田	27.3 ha	18.1 ha
	水 没 した 畑	53.0 "	24.1
	水没した採草地	35.3 "	0.08
	水没した山林	56.4 "	12.2

かくして、とくに王滝村においては、従来の木曾型の民家様式は大部分その形態を改めるにいたった。一般に貯水用ダムは発電用ダムに比較して水没面積が広大であり、地域におよぼす影響も発電用ダムに比較して大きい。

六、おわりに

以上、愛知用水の事業の進展にともなう環境の変化を歴史地理的見地から述べた。知多半島の乏水性が用水開発計画の基盤であるが、これは気候条件よりも台地丘陵性の地形的要因によることが多い。しかし、期成運動の直接の動機となったのは、当時の深刻な食糧危機の最中に見舞われた大干害であった。かくして、過去における木曾川の利水形態や隣接地域の明治用水をモデルとして、先進的な指導者が立ち上り、中堅的農民層に働きかけ、粗朴ではあるが、精神的な期成運動を展開し、関係市町村を抱え込んだ期成同盟会を組織した。同盟会は安定した水田灌漑用水を渴望する農民の心情をくみ上げ、それを獲得するためには結束して用水期成の運動を展開する必要を説き、あらゆる政府・官僚機構に対して陳情をつづけ、この間に世界銀行にまで接近するにいたった。陳情の進む過程において、この用水は単なる水田灌漑のための用水ではなく、地域開発をともなった多目的総合用水の構想に発

第6表 牧尾ダム建設にともなう村外移住戸数

(両村資料による)

移住先市町村		王滝村	三岳村
長野県	福島町	3	2
	上松町	2	2
	山口村	1	
	日義村		1
	塩尻市	4	1
	松本市	4	6
	駒ヶ根市	3	
	長野市	1	
	辰野町	1	
	松川町(北安曇)	1	
	三郷村	1	1
	南箕輪村	1	
	飯田市	1	2
	豊科町		
	宮田村	1	
飯島町	2		
愛知県	三好町	6	5
	豊橋市	1	5
	旭市	1	
	小牧市		1
岐阜県	岩倉町	1	
	名古屋		
	中津川市	8	10
	恵那市	1	2
その他の都府県	福岡下町	1	1
	京都府	1	
	大阪府	1	1
	秋田県	1	
計		52	41

展した。

あたかも、中央政界は安定期に入り、戦後の再建運動が活発となり、その一つに国土総合開発法の制定があり、これにもとづく木曾特定区域の設定となった。この時点で用水計画は表面に浮び上り、世銀借款をバックとして、国家権力に吸いあげられて愛知用水公団が設定され、国家的大事業の錦旗のもとに、米国流の能率のよい作業方式にしたがって、事業は急速に推進された。この工事期間は、あたかも日本経済の高度成長期となり、用水もこれに即応するため、公団、県などの上部機関が主体となり、営農、畑地かんがい、果樹園芸の強力な指導が行なわれることとなった。農民側はまったく受身の立場に立たされた。しかも、その成果が十分に熟しきっていないうちに通水を見た。しか

も、この地域が名古屋大都市圏内に包含されているので、いろいろな問題を起しているが、これについては諸論があり、将来の研究課題でもある。

いずれにしても、このような大きなプロジェクトの進展の基盤となったのは、国家社会環境であり、これを具体化するものが関係地域の歴史地理的条件で、その契期となったものが気象災害であった。

文献と註

- (1) 森滝健一郎 愛知用水と愛知用水地域 地理学評論 三六卷二号(一九六三年)
- (2) 愛知用水学術調査団代表、酒井正三郎 愛知用水と地域開発 東洋経済新報社(一九六七年)
- (3) 愛知用水公団・愛知県 愛知用水史(一九六八年)
ただし、実質上に本書が公刊されたのは一九七〇年の夏である。
なお技術関係についてはつぎの大冊がある。
愛知用水公団 愛知用水技術誌四卷(一九六二年)
- (4) 愛知県 愛知県農業気候図(一九五二年)
- (5) 竹内常行 溜池の分布について 地理学評論 第一五号一―四号(一九三九年)
- (6) 拙稿 藩政時代における尾張の人口の分布と変動、地理学評論 二六卷五号(一九五三年)
- (7) 半田市役所 半田市史(一九五〇年)
- (8) 南知多町誌 南知多町(一九六五年)
同書の一九〇ページに「天焼き」と称する記録がある。大正一三(一九二四)年の大干害に際し、各部落がワラを丘陵上に積みあげ、郡役所の命によって一斉に点火し雨を呼ぼうとした。その後わずかな降雨を見たが、これがこの「天焼き」の効果とは認めがたい。なお古老の言では数回このような経験があったという。
- (9) 愛知用水土地改良事業計画書の資料による。
- (10) 緋田工 愛知用水運動の回想 ナゴヤジャーナル(一九五五年五月二九日号)

- (11) 浜島辰雄談その他による。
- (12) 岸哲夫 明治川 崇文館（一九四七年）
- (13) 知多郡農村同志会 愛知用水の趣旨と理想（一九二九年）
- (14) Aichi Irrigation Water System Realization League. Aichi Irrigation Water System (Its prospectus & Ideal)
1949
- (15) 東海製鉄株式会社 当社の概要（一九六二年）
これによって、愛知用水を水源とした愛知県営工業水道により、日量二五万トンまでの淡水を供給されることとなった。
- (16) 拙稿 愛知用水と畑地かんがい 地理、六卷八号（一九六一年）
- (17) 王滝村 王滝村史（一九六一年）
- (18) 上野福男、高校地理研究会御岳乗鞍周辺の地理 二宮書店（一九六九年）
- (19) 村上三智雄 木曾川源流の村々―王滝・三岳村 地理の広場、第一〇号（一九七〇年）